

# 浦賀文化

平成30年(2018年)7月1日

第54号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 浦賀八景

浦賀文化26号・27号で浦賀八景を詠った漢詩を掲載しています。今回は、浦賀八景に選ばれた風光明媚な景色を浦賀のまちの歴史とともに紹介します。



浦賀の地名は「浦川」「浦河」からといわれています。「浦」には「海」の意味があり、そこに川が流れている光景を想像させます。戦国時代、関東地方を拠点にして勢力を張っていた後北条氏が、一五五〇年代半ばごろ発行した文書に「浦賀」の地名が現れると言います。水軍のための町の発展を願い、「海を喜び、祝う」という意味から、川を賀に替えて「浦賀」としたという説があります。往古より、海を背景とした風景の美しさは「浦賀八景」として称えられてきました。

今回は、江戸時代の後期から明治初期に作られた「浦賀八勝(八景)」(作者・年代不詳)について見てみましょう。  
八景とは、元来、十一世紀ころの中国の名勝地「瀟湘(しよしやう)八景」に由来します。湖南省洞庭湖付近の瀟水と湘江という二つの大河が合流するあたりに見られる景勝地を、四季、天気、朝昼晩という時間の移ろいごとに八つの絵で表現し、中国では伝統的に画題とされてきました。それが十五世紀ごろ日本に伝わったとされています。

◇ ◇ ◇

を組んだ雁の群れが舞い降りてくる様子が見えます。  
**柳涯夜雨(りゅうがいやう)**  
柳涯というのは、現在の浦賀警察署の脇を流れていた蟹田川の岸辺をいいます。このあたりは、明治の中ごろまで遊郭がありました。夜雨に煙る遊郭街を港の船から眺める風景は、さぞ情緒に富んでいたことでしょう。

**尾村夕照(おむらせきしやう)**  
尾村は、東浦賀とかもめ団地の間の大室(おおむろ)と呼ばれるところですが、山々の紅葉が水面に映え、夕日がさらなる美しさを添えて、錦秋の美しさがありました。

**館浦晴嵐(やかたうらせいらん)**  
館浦は、現在、西浦賀にあるマリナーヴェラシスのあるあたりを指します。エメラルドグリーンに輝く海辺に沿う山には、青葉若葉が繁り、清々しい風が薫るようです。

昭和十八年に横須賀市と合併するまでの浦賀は、鴨居や走水、大津、根岸などを含む「三浦郡浦賀町」という自治体としての浦賀町でした。現在でも、横須賀市の中心部に行く時は、同じ市内であるにもかかわらず「横須賀へ行く」という人もいます。それほど旧浦賀町というのは、そこに暮らす人々には、生活の中心部として愛着が残っているのでしょうか。

**扇海秋月(せんかいしゅうげつ)**  
扇海とは浦賀湾が、扇を開きかけた形をしているところから、こう呼ばれています。静寂な浦賀の海に、秋の月がさやかに反射しています。

**平根暮雪(ひらねぼせつ)**  
夕暮れ時に燈明崎から平根山を眺めると、うっすらと雪化粧をしているのが見えます。

**芝生落雁(しばうらくがん)**  
浦賀駅からなだらかな登り坂を行き、桜が丘との境までを「しばう」と呼んでいます。空を眺めると、かぎ型の隊列

浦賀は、明治時代に軍の施設や造船所が建設されたり、関東大震災の被害を受けて土砂崩れが起きたりして、地形が変わりました。現在の浦賀駅前には広がるドック跡地の附近は、江戸時代の埋立てによる「築地新町」と呼ばれていた造成地がありましたが、そこには人々の暮らす地域や、新規に船を造ったり修理をするための「中堀」と呼ばれる施設が設けられていました。その「築地新町」も、明治八年には「海軍屯営所」と呼ばれる水兵訓練施設が設けられ、明治二二年につくられた陸軍の要塞砲兵幹部練習所の建設に伴い消滅していきました。やがて、手狭になった軍施設の馬堀への移転とともに明治三〇年には造船所が設けられました。

このように、浦賀の風景は時代とともに大きく変化してきましたが、「浦賀八景」に思いをはせる時、奉行所を中心に、大きな白帆を張った出船入船でにぎわいを見せていた港、商人たちの活気ある歓声、遠い時代への郷愁が湧いてくるような気がします。

今、奉行所の設置から三〇〇年を迎えようとしている浦賀のまちは、生まれ変わりの胎動を予感させています。人々の郷土愛に包まれて新たな出発の時を前に、浦賀にはどんな将来が待っているのでしょうか。

(芳賀久雄)



# 歴史 語らい座 浦賀奉行所編

郷土史家

## その四

山本 詔一



### ●輸送品制限・緩和される

享保五年（一七二〇年）浦賀奉行所が開かれ、翌年二月、船番所で廻船積荷検査（船改め）が開始された。武器類の江戸への持ち込みは厳しく制限されており、船の関所も「入り鉄砲に出女」であった。しかし、今から思うと何故こんなものまで制限していたのであろうか疑問に思うものもあった。

延享四年（一七四七年）三月、老中・酒井雅楽頭から四代目奉行・青山齋宮に対し、浦賀通船許可書が示された。その書類には、「湯風呂、土つきの芝、庭石、砂利、植木の類、鼓、太鼓、笛、琴、三味線、碁盤、将棋盤、双六盤、鳥かご、これらの品、今までは船で運ぶことを禁止していたが、これからは自由に運んでよろしい」旨が記されていた。この許可書にみるように、遊芸関係や庭造りなど趣味の世界のものが寛大に取り扱われるようになったことがわかる。

この年、浦賀湊で検査を受けて江戸へ下った廻船の総数は五五九三艘であり、当然、上り船もほぼ同数であるので、年間で一万艘を超える船が浦賀湊へ入ったことが分かる。一日に三〇艘以上の船改めが行われていたことになる。

### ●流人船への警備と心得

罪人が遠島（ここでは伊豆七島へ送られること）の刑と決まりいよいよ島に送られる日時が決定すると、江戸から「浦触」が回る。江戸から浦賀までの海岸付きの村々では、決められた通りの番船や水主役が出て、流人船のサポートをした。浦賀でも流人船が来る日が分かるとすぐに準備に入った。

流人船の出帆日が決まると、町奉行所から罪人たちの親戚縁者に通知された。罪人でも裕福な者であれば、親戚縁者よりお米や金銭などが差し入れられ、島に持ち込むことが許された。差し入れが届かない者には、武士には一両、庶民には二分が役所から支給された。罪人たちは、島に着くとすぐに自給自足の生活となるため、こうした措置が取られたのである。船が出る日は、小伝馬町の牢から船手奉行・向井の屋敷に移された。この裏口から小船に乗せられ、永代橋（あるいは霊岸島）近くに碇泊している流人船に移り、品川沖で風待ち潮待ちをして、一路浦賀を目指す。浦賀では東西の村と下田問屋が一丸となって、番船、曳き船を用意して待ち構えて、見届け船からの連絡が入るとすぐに行動できるようになっていた。流人船が浦賀湊に到

着し碇を下すと、「七五尋触れかかり」といって、七五尋以内に他の船が碇泊できない決まりになっていた。碇泊すると罪人たちを甲板ならべて人別が行われた。警固の同心が船番所から出て、船手より証文と人別書付を受け取る。これを船番所に持ち帰って、与力がすでに送られてきていた証文と読み合わせをした。これで間違いがないことが証明されると、船番所の役人が流人船へそれを伝え、江戸にも浦賀入津の報告をした。また、島へ行く最後の寄港地となる三崎の御役宅へ流人船浦賀入港の知らせを出した。

浦賀に奉行所が置かれてから三〇年余で、二四〇人以上の罪人が遠島の刑に処せられている。

※一両は四分、二分は一両の半分  
※一尋は両手を広げた長さ

### 俳句の散歩道

ポンポン船追ひかけていく花筏  
渡辺 初子

見はるかす開国の海春深し  
石川 優子

### 笑話一題

何年前か、当館の講座で浦賀の町を散策している時のこと。浦賀奉行所跡地にやってきてふと上を見上げると、電柱に『奉行所』の文字が。  
現代の設備に、昔の、しかも江戸時代の施設の名前が記されているアンパランスに興味をそそられます。  
電柱には、電力会社や電話会社がつける電柱番号がついているそうですね。その場所の古い地名や、昔あった公共施設の名前を使ったりするとか。  
『奉行所』なんて、ずいぶん自由につけているなあ。でも：奉行所が確かにここにあったのだと、なんだかうれしく思ったのでした。  
(みなとのヨコ)



### 浦賀奉行所開設300周年



奉行所スカリン

